



こころに風を入れながら・・・

ひこばえ通信第7号

令和4年3月15日

発行責任者茂木直子

ついに現れました！ (茂木直子)

今年も春闘が始まりました。労働者の給料の引き上げやボーナス引き上げの闘争の先頭に立っている人は、日本労働組合総連合会会長・芳野友子(55歳)氏です。

去年10月6日、史上最年少の日本初の女性連合会長が選出されたのです。日本の労働者700万人の組合員と43の組織を率いる労働者の組合総連合のトップです。

芳野氏は「まさか私に声がかかるとは…」と驚きつつ「有能な女性先輩たちの多くが“ガラスの天井”を破れなかったばかりに、本人の意向とは裏腹に退任していく姿を見て、悔しかった。やっぱりチャンスは逃してはいけないという気持ちで引き受けた」と。私の役割は『全ての連合の活動の中にジェンダー平等の視点を入れ、全ての会議やプロジェクトに複数の女性を入れること』。

「女性の人権」を勉強した人が賃金や経営対策に取り組めば、必ず施策にジェンダーの視点が入る。コロナ禍では、非正規雇用で働く人の地位が不安定になり、家庭内でDVを受ける人が増え、女性が弱い立場にあることが明確になった。弱い人を皆で支えあっていく、そういうことも労組の役割だと思っている。きっちり対応していないといけないと思います」と、さわやかに現状を踏まえた所信を表明されました。社会の男女の仕組みが改善されるものと、心から応援しています。



妻がコロナに罹った (A. S)

現在の新型コロナ・オミクロンの感染力はすさまじい。一日の感染者数は東京で1万人を超え、幼児から老人までの全国感染者は一日10万人以上にも上っている。いつまで続くのか…。

私の妻がコロナにかかったのは去年の9月7日のこと。ワクチン接種の前日に37.2度あったが、平熱が高いので大したことないと思い、ワクチンを接種した。その後発熱し倦怠感(特に食欲不振)が1週間続いたが、ワクチンの副作用と考えていた。診察に行った医師はコロナ陽性を警戒し、電話応対だけであった。その後も妻は出勤していたが食欲不振となり、梨、リンゴのようなものしか食べられなくなった。10日目に会社を休んで通院し、点滴をうけたが、医師からは「ワクチンの副作用が10日間位も長引く人もいるから」と、大したことないように言われた。肺のX線も撮ったのに何も言われず、気管支炎があると言われ、自宅で静養していた。食欲不振は相変わらずだった。再度点滴を受けに行った際に再びX線を撮った。その結果「すぐ保健所に行くように」と言われ、保健所でのPCR検査の結果、陽性が判明した。ワクチン接種から2週間後のことであった。

保健所からは「ホテル療養」が指示された。妻は自ら運転してホテルに行き、体温と血中酸素飽和度を3つのパルスキシメーターで確認したところ、抗酸素飽

お化粧講座 (S. T)

私は去年、POLA 化粧品の化粧指導がひこばえの事務所で行われ、参加した。お化粧の基本を教えてもらった。眉を描き、アイシャドウをパープルで彩ってもらい、頬にピンク系のチークをさっと入れ、口紅で仕上げた。別人に変身した。

すごいね～。化粧次第でこんなにも変わるのか～。参加した女性たちも普段あまりお化粧はしないと聞いていたが、彼女たちの顔を明るい化粧が彩ると、皆、心までもが華やかになった。明るい雰囲気、喜びの時間が流れた。

いつも鬱々としている私にとって、化粧は無縁だった。だいたい自分の顔も見ない。それでも最近「あまりにもひどいかな…」という意識が湧いてきて毎日、顔を洗うようになったし、身なりにも少し構うようになった。そうすると気持ちのいい朝を迎えられる。そんな私に降ってきた「キラキラしたお化粧」という出来事が、私の中の何かを変えてくれた。「ああ、私、化粧しよう！こんなに変わるなんて！」と、私の中の気持ちまでもが明るくなった。私はなんとなくうれしい気分、しばらくは浮かれていた。またこのような機会があったら、ぜひ参加したいと思う。女性たちの優しい雰囲気。

和度が低い(91~93)と言われ、翌朝入院となった。発症は6日ないしは7日と判断されたため、発症から5日以内の投与に有効とされる「抗体カクテル療法」はできなかった。

女医さんからは電話で「肺に影がみえるのでこれからレムデシビルとステロイドをやる。いつ重症化するかわからない。最低でも2週間の入院が必要」と言ってきたが、それ以後何の連絡もなく、落ち着かない日々を過ごした。

18日(土)に妻からのメールが来た。鼻から酸素吸入を入れているという。この状態を「幸福な酸素欠乏症」というのではないかと思った。本人はそれほど意識できず、切迫した様子ではなかったが、「急激に悪化する状態であることは間違いない」と思った。「自分に何ができるだろう」と真剣に考えた。妻を元気づけられるのはラインで応えるしかない。妻のメールに毎回注意を集中し、色々検索して調べたことを返信し、励ましていた。

とても気が張っていたと思う。自分では気づかなかったが、妻の退院間際にフーと身体中の力が抜けた感じがした。人1人に注意を集中することが、こんなにもエネルギーも神経も使うものだとして初めて知った。治療や看護、介護に従事する人たちは常に真剣に患者さんと向き合っていてくれる。その大変さがしみじみと分かった。感謝のみである。

[ここに入力]

